

EurekaXII

六年制通信 No.28 令和6年11月22日(金)号

見たらダメ

先週号でユーモアが大切だと書きましたが、私自身はどういうところにユーモアを感じるのかと生徒諸君に聞かれたので(ときどき英語や本の質問に来てくれるんですね。これが嬉しいんだなあ)答えようと思います。前回も書きましたが、チャップリンの映画なんかいいですね。必ず貧しい青年が出てきます。しかし、深刻な状況の中にも一時一時を楽しもうとする姿勢が見えるのですね。「街の灯」では自分も困っているくせに盲目の女性を助けようと必死になる様子がユーモラスに描かれます。くすっと笑えるシーンがたくさんあります。チャップリン演じるこの青年は目くじらを立てて他人を責めるということがありません。まあ、何と言いますか、罪のない愚かな行動に満ちていると言いますか、そういうところから滲み出るおかしさが私は好きです。

また、ちょっと意外に思われるかもしれませんが、様々な神話や『千一夜物語』などに出てくる「大真面目な愚人」がいいですね。神話ですから神様も登場しますが、これが非常に人間らしい愚かな行動をするのですね。私はそういうところが面白くて仕方ないのですが、あまりそういう視点で語られることはないようです。だいたい勤勉なバカほど迷惑なものはないと言いますが、勤勉とは少し違うのですね、大真面目というのは。例えば『古事記』を読むと、最初の方に大切な二柱の神様イザナキとイザナミが出てきますよね。淡路島から四国、九州、本州といわゆる国産みをおこなった後に多くの神様もお産みになります。神産みですな。八百万の神がいるわけですからね、日本には。ところで「八百万」、ちゃんと読めましたかな。さて、イザナミは火の神を産むのですが、何とその火でやけどを負って死んでしまいます。そんなことって、ありますか。神様ともあろうお方が予見できなかったですかね。火を産んだらやけどするぞって。そもそも神様はやけどなんてしないと思いませんか。私はこのシーンに滑稽さを感じます。笑っては失礼なのですがね。

そしてこのあと『古事記』には古今東西の神話や昔話など様々な物語に共通して現れる有名なモチーフが出てきます。皆さんも知っているでしょう。「見たらダメ」と言われて見てしまい大変な目に遭うという「鶴の恩返し」みたいな、あのモチーフです。で、絶対に見るのですね、これが。地域も時代も違うのにこの手の話が生まれるということは、見るなどと言われると見るというのが人間の本質というわけでしょう。この愚かしさが面白いではないですか。冥府に落ちたイザナミを追いかけたイザナキは決して姿を見ないでほしいと言われて、案の定見るわけです。で、冥府から追われ二度とイザナミと会えません。ちなみにイザナミは冥府の食べ物を口にしたために出

られないということになっているのですが、この発想も、つまりその地の食べ物を口にすると離れられなくなるというモチーフはギリシア神話にも見られます。興味のある人はオリュンポス十二神の一人、大地の母デメテルについて調べてごらん。この世に四季のある説明に使われる有名な神話だから知っている人もいるでしょうが。

「見るな」の他には「振り返るな」、「覗くな」、「食べるな」、箱を渡して「開けるな」などがあります。箱に至っては「開けるな」と言うのなら渡すなよ、ですよ。旧約聖書には、ソドムとゴモラの滅亡の際に逃げ出すロトの家族に神が振り返ってはならぬと言いつけたのに、もう少しで脱出というところでロトの妻が禁を破ったために塩の柱にされてしまったという話があります。「食べるな」は、これも旧約聖書ですが、アダムとイブが林檎を食べてエデンの園から追放される有名な話ですね。前にも書きましたが、最初に食べたのはイブですからね、念のため。「覗くな」もたくさんありますね。扉を開けるなとかバリエーションも豊富です。私、「鶴の恩返し」を初めて知った時、別に鶴ならええやん、また美しい妻に変身してくれたらええやん、これが覗いたらチンパンが機織りしていたら元の姿に変身しても嫌やけど、と思いましたな。そして、鶴がどうやって機織りしているのか気になりました。鳥ですから。手じゃなくて羽根ですからね。無理でしょ。「開けるな」で思い出すのは浦島太郎とパンドラですね。浦島太郎の玉手箱。乙姫さんは一体何のためにこれを渡したのでしょうか。しかも、開けるなと言ったところで絶対開けるに決まっているのに。浦島太郎をお爺さんにしたかっただけ、なわけないですよ。皆さん玉手箱を開けたところから独自のユーモア作品を作ってみてはいかがでしょう。パンドラは次回触れます。

今週のおすすめ

・降田 天 『偽りの春 神倉駅前交番狩野雷太の推理』（角川文庫）

この作家は初めてです。このミス大賞受賞作『女王はかえらない』も持ってはいませんがまだ読んでいません。いずれまた紹介しますね、面白かったら。降田天は鮎川颯と萩野瑛の二人で一つのペンネームなのですね。もちろん知りませんでした。

『偽りの春』は五つの短編集で、その全てに狩野雷太が登場します。優秀な刑事だった狩野がなぜ交番勤務をしているのか、その謎も最終話で明かされます。どの話も面白いですよ。謎解きの快刀乱麻ぶりがすごいですけど、町のことをよく知っている警察官であればひょっとしたら狩野のような人がいるかもね。確かに、防犯もそうだし犯人探しも土地勘がなければどうしようもないでしょうね。東野さんの『新参者』みたいですね。さて、五作品のうち私は「見知らぬ親友」が印象に残っています。他人の言動を誤解して解釈してしまうことはよくあることです。ほんの少し勇気を出して本音をぶつけ合えば分かりあえただろうに…。友情というのは素晴らしいけれどもなかなか難しい面もありますね。チンパンジーにも友情があるらしいですが、チンパンの世界と人間とはどの程度違うのでしょうか。「見知らぬ親友」は女性同士のお話ですから、私にはピンと来ないこわ〜い瞬間もありましたけど。

BGMは Linda Ronstadt の *Desperado* でした…。